



Title	日本語における名詞の程度性 : 程度的名詞と非程度的名詞の違いを中心に
Author(s)	チョルカ, ラルカ マリア
Citation	間谷論集. 2023, 17, p. 47-68
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91364
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

〈研究論文〉

日本語における名詞の程度性

——程度的名詞と非程度的名詞の違いを中心に——

チオルカ ラルカ マリア

〈キーワード〉 程度的名詞 非程度的名詞 程度副詞 スケール 品詞の連続性

1. はじめに

従来、程度性（gradability）は形容詞の振る舞いが考察され、いわゆる程度副詞との共起可能性によってその有無が判断されることが一般的である。ただ、文脈によって名詞に関しても程度的な使用が可能であるということは、古くから指摘されている。

名詞の観点から程度性を扱う研究は、特に英語の名詞が出発点とされることが多く、英語では、名詞の中に、程度的名詞（degree nouns）として捉えられるものも存在していると指摘されることも多い。以下は Bolinger（1972）が挙げている例文である。構文が同じであるにも関わらず、主語として機能している名詞、behavior（行為）と misbehavior（不正行為）の違いから、解釈の違いが生じるのである。（1a）は、「こんな行為にいつも脅かされる。」という解釈となり、「行為」の具体的な内容あるいはタイプが示されるだけであり、それに対し、（1b）は、「こんな不正行為にいつも脅かされる。」という解釈となり、「不正行為」の程度、言い換えれば、その不正行為がどれほど深刻であるかが表されていると言う。つまり、後者の misbehavior（不正行為）は程度的名詞として捉えられる。

- (1) a. Such behavior always frightens me. b. Such misbehavior always frightens me.

(Bolinger 1972:60)

日本語学研究においては、いわゆる程度副詞と共起できる名詞に関する考察がしばしば行われているが、そのほとんどは、日本語の名詞における「程度性」を扱っているとは言い難い。換言すれば、日本語における名詞の程度的な使用の分類や、その裏にあるメカニズムは明らかになっているとは言えない。日本語には、程度的名詞と非程度的名詞の区別が見られるのか、そしてもしその区別がある場合、それぞれの程度的な使用の間にどのような違いがあるのかを更に検討する必要があると思われる。例えば、以下の例 (2) に示す使い方「非常に日本人(です)」は、特殊な言い方として捉えられるが、必ずしも珍しいわけではない。「日本人」のような名詞は、「とても」のような程度副詞と共起している文脈においてどのような解釈になるのか、そしてなぜその解釈になるのかを明らかにするためには、日本語の名詞における程度性について分析する必要がある。

- (2) その、やはり仕事をごちゃごちゃいわれるのはといいますか、どうしてもやはり行政官も非常に日本人ですので、完璧さというのですか、そういうコンシステンシーって非常に気にしているところが、日本は特にあると思うのですけれど。

(<http://www.aec.go.jp/jicst/NC/iinkai/teirei/siryo2016/siryo18/siryo5-2.pdf>)

そこで本稿では、日本語における程度的名詞と非程度的名詞との区別を検討し、それぞれが程度性表現と共起している文脈を考察することを目的とする。

2. 先行研究とその問題点

名詞の程度的な使用に関して詳細に分析している代表的な研究として、Bolinger (1972) を取り上げる。Bolinger (1972) では、英語における名詞は、程度的名詞 (degree nouns) と、非程度的名詞 (nondegree nouns) に分類される¹。Bolinger (1972) で挙げられているこれらを区別する手段の中から、本稿では

big や great や terrible 等のような形容詞との共起、そして such との共起における解釈を取り上げる。

まず、big のような形容詞との共起に関しては、その対象となる名詞が程度的であるか、非程度的であるかによって、形容詞の機能の違いが生じると指摘されている。具体的に言えば、このような形容詞は、(3a) の fool のような程度的名詞を修飾している文脈において程度を表すことができる。それに対して、(3b) の lad のような非程度的名詞と共起している文脈においてはサイズを表し、その名詞が示す対象を区別する (distinguish) 機能のみを持つ。

(3) a. He is a **big fool** 'he is very foolish'. (degree)

b. He is a **big lad** 'he is large in size'. (nondegree)

(Bolinger 1972:146 太字下線引用者)

また、such との共起に関しても、名詞が程度的であるか、非程度的であるかによって解釈の違いが見られる。上記の例 (1ab) と同じパターンになる以下の例 (4ab) を見よう。(4a) にある blunderer のような程度的名詞の場合には、程度が表されており、(4b) にある person のような非程度的名詞の場合には、対象の特徴やタイプが表されている。Bolinger (1972) によると、(4a) のような文脈は 'of X magnitude' として解釈できる intensifying use であり、(4b) は something 'of X identity' として解釈できる identifying use となる。

(4) a. **Such a blunderer** always frightens me.

b. **Such a person** always frightens me.

(Bolinger 1972:60 太字下線引用者)

日本語学研究において、程度的として分類できる名詞の存在、あるいは程度的名詞と非程度的名詞の区別は、管見の限り明らかにされていない。上記のとおり、先行研究の多くは、特定の程度副詞に注目して、それと共起できる名詞の分類を行い、その観点から名詞の特徴を考察している。

佐野 (1997) は、程度副詞と名詞が共起している文脈において「の」の介在が必要であるか否かを基準に、日本語の名詞の分類を行っている。特に「かなり」のような程度副詞との共起に注目し、「の」の介在を必要としない名詞の例として「旧式」「新式」「新型」「旧型」等を挙げ、これらは形容詞的要素が前項とする合成語であり、副詞は意味的にその形容詞的要素のみを修飾していると述べている。

- (5) a. 「かなり旧」式 b. 「かなり新」型

(佐野 1997:124)

一方、「美人」「近道」「薄味」等のように、「の」を介しても介さなくても「かなり」のような程度副詞と共起できる名詞は、前項が形容詞的要素の複合語であるが、程度副詞はその前項のみではなく、複合語全体を修飾していると主張している。換言すれば、語全体で属性を表し、形容詞性を持っていると述べている。

- (6) a. かなり美人だ。 b. かなりの美人だ。

(佐野 1997:125)

程度副詞と共起できる名詞が、形容詞に類似した特徴を持っているという指摘は蔡 (2018) でもされている。蔡 (2018) は、「とても」と共起できる言語形式を調査し、その中で名詞に関しても述べている。「とても」の修飾先となれる名詞は、形容詞に倣って「近未来」「仲良し」「金持ち」等のような特性名詞と、「楽しみ」「ショック」「疲れ気味」等のような感情名詞に分けられると指摘し、「とても」は名詞と関わる程度を表すことができると主張している。例えば、以下に引用する例文に関しては、「とても」はどのくらいのお金持ちかを示すと述べている。

- (7) ジョーは目を輝かせた。文がとても金持ちだと聞いていたからだ。

(BCCWJ 『マイケル・ジャクソンの真実』)

(蔡 2018:74 太字下線引用者)

確かに、程度副詞と共起できる名詞は、形容詞的要素を含む、あるいは形容詞のように属性を表す場合もあるということは否定できない。ただし、程度副詞と共起している全ての名詞がそうであるとは言い難い。例えば、上にも挙げた例(2)に関しては、形容詞的要素が含まれているとは言えず、「どのくらい日本人か」という解釈も相応しいとは言えない。

- (2) その、やはり仕事をごちゃごちゃいわれるのはといいますか、どうしてもやはり行政官も**非常に日本人**ですので、完璧さというのですか、そういうコンシステンシーって非常に気にしているところが、日本は特にあると思うのですけれど。

(<http://www.aec.go.jp/jicst/NC/iinkai/teirei/siryo2016/siryo18/siryo5-2.pdf>)

本稿では、以上のような名詞と程度副詞との共起を説明するためには、日本語に関しても程度的名詞として機能できるものとできないものを区別し、それぞれの程度的な使用を考察する必要があるという立場をとる。言い換えれば、「かなり(の)美人」と「非常に日本人」のような言い方の違いは、それぞれの名詞が程度的であるか、非程度的であるかによって生じると考える。

3. 日本語における程度的名詞の特徴

まず、日本語で程度的名詞として捉えられるものに注目する。以上に述べたとおり、程度性は一般に形容詞の観点から考察されることが多い。Kennedy and McNally (2005) によると、程度性を持つ形容詞 (gradable adjectives) は、程度値 (degrees) のセットとして見られるスケール (scale) を構成する。

The approach that we assume here is one in which gradable adjectives map their arguments onto abstract representations of measurement, or DEGREES, which are formalized as points or intervals partially ordered along some DIMENSION (e.g.

height, cost, weight, and so forth; we provide a more detailed account below). The set of ordered degrees corresponds to a SCALE, and propositions constructed out of gradable adjectives define relations between degrees with truth conditions.

(Kennedy and McNally 2005:349)

なお、名詞の程度的な使用を扱う先行研究においても、スケールが用いられることが一般的である。Morzycki (2009) は、以下の (8) と (9) のような例文を挙げて、英語で **enormous** や **huge** 等のような、サイズを表す形容詞が、程度性表現として機能できる前提から始め、これらと共に起できるある種の名詞が元々は程度的名詞となると指摘している。そして、程度的名詞は、意味の観点から見れば、一つのスケールと関わる側面がそれ以外の側面に比べて、重要な役割を果たすと判断されるものであると述べている。

(8) George is an **enormous** idiot.

(9) Three **huge** goat-cheese enthusiasts were arguing in the corner.

(Morzycki 2009:176 太字下線引用者)

Another way of articulating what I intend by 'gradable noun', then, is that gradable nouns are those for which a single criterion can be distinguished from the others as the most salient. For idiot, it is stupidity (and not, say, animacy); ... for goat-cheese enthusiast, it is enthusiasm for goat cheese. It is this ability to identify a single scale that distinguishes nouns that admit degree readings of size adjectives from those that don't.

(Morzycki 2009:186)

本稿では、Morzycki (2009) に従い、日本語で程度的名詞として捉えられるものは、意味の観点から見れば、特定のスケールが中心的となるものであると考える。そして、ある名詞が程度的として分類できるかどうかは、程度性表現との共起における解釈によっても判断できるという説を進める。具体的に言えば、

Bolinger (1972) に倣って、日本語のある名詞が程度的として分類できるか否かを検証するための二つのテストを提案する。以下に、「バカ」を程度的名詞の代表的例として用いて、それぞれのテストに関して詳細に考察する。

まず一つ目は、日本語で程度性表現として機能できると考えられる形容詞との共起である。英語で **big** や **terrible** 等のような形容詞が程度を表すのに対して、日本語では「すごい」及び「ひどい」が程度的名詞を修飾している文脈において程度を表すことができると考えられる。例 (10) では、「すごい」は「バカ」が示す対象に関する、発話者のポジティブな評価を表しているとは言い難く、程度を表していると考えられる。言い換えれば、「混ざっているバカはすごい」ではなく、「混ざっている人の中にとってもバカな（とても頭が悪い）人もいる」という解釈になるのである。

- (10) もちろん、漫画家はみんなバカというわけではなく、手塚治虫が医師免許を持っているように、頭が良い人も多いのだが、全員頭が良いと思われるのも困る。他の職業と同じように「たまにすごいバカが混ざっている」と思って欲しい。

(<https://shosetsu-maru.com/essay/hakuman/32?page=2>)

二つ目のテストは、名詞が「こんな」類と共起している文脈における解釈となる。このテストは、Bolinger (1972) が指摘する、名詞と **such** との共起による解釈に最も近いと考えられる。以下の例 (11) では、「こんな」を通して程度が表されていると言える。具体的には、雇われる人の特徴や性格が示されているのではなく、「これほどバカである（これほど頭が悪い）人を雇う」という程度が表されているのである。

- (11) 誰が見ても採用されるだろうという人がアッサリ不採用になるし、「何でこんなバカを雇うんだ！」と言いたくなる人を採用したりします。結果を見るまではわかりませんよ。

(<https://jobcatalog.yahoo.co.jp/qa/list/13254162948/>)

以上の例(10)と例(11)において、文脈が異なるにも関わらず、そして「バカ」と共起している程度性表現が異なるにも関わらず、それらの程度性表現によって表される内容は同様である。具体的に言えば、「頭が悪い」として説明できる側面からなるスケールが表されているのである。ただし、Bolinger (1972)も主張しているとおり、このような程度性表現は、名詞が示す対象を区別する働き、あるいはその対象の特徴やタイプを表す働きをすることも可能である。名詞が程度的であるか否かを判断するために重要なのは、程度が表されているという解釈も可能であるかという点である。「バカ」の場合には、(10)と(11)のように、このような解釈も可能であるため、程度的名詞としての分類が妥当であると考えられる。

なお、日本語の名詞が程度副詞と共起している文脈を扱う先行研究でも、「スケール」という概念が見られる。以上に取り上げた佐野(1997)は、「美人」等のように、程度副詞との共起において「の」を必要としない名詞に関して「複合語全体でスケールをもつ状態を表している」と述べている(126)。佐野(1997)にはこれ以上スケールに関する言及はないが、程度副詞との共起から見て「美人」と同じタイプになる名詞として、以下の例が挙げられている。

勉強家、努力家、恥ずかしがり屋、照れ屋、嘘つき、悪(わる)、悪人、好青年、大物、大男、食いしん坊、甘えん坊、ナルシスト、お嬢さん育ち、やり手、高学歴、変人、美男子、田舎者、早起き、短足、大都市、大金、大損、高望み、重荷、薄味、早足、ご馳走、近道、遠回り、長生き、大作、安物、薄給、人気・・・

(佐野 1997:125)

これらの名詞は、一つのスケールが中心的となっていると考えられる。例えば、「美人」は美しさのスケール、「勉強家」は勉強に対してどれほど熱心であるかを表すスケールが中心的であると思われる。つまり、これらの名詞は、程度的名詞として捉えられる。実際には、上記の二つのテストを行っても、程度的名詞

としての分類が成り立つ。例えば、「美人」の場合には、次のとおりとなる。

- (12) もう一つの失敗例は芸能人です。ラルクの **ken** の結婚披露宴に招かれ、喜んで行ったところ、隣の席にすごい美人が座っていました。ドキドキしながら話をして、20 代の有名女優らしいことまではわかったのですが、名前を聞く勇気がありませんでした。

(<http://ich.web.nitech.ac.jp/members/ryakureki/ryakureki.html>)

- (13) このツイートにファンからは「サンフレッチェの新たな女神」「ユニフォーム姿めっちゃかわいい」「こんな美人がサポーターとは」「サンフレを好きになってくれてありがとう」「これはめっちゃ凄いこと」「サンフレさんズルすぎだろ…」「ホームに来て欲しい」などのコメントが寄せられている。

(<https://news.yahoo.co.jp/articles/bb4c41520e9a00e5d017150faf29c49b8b2d6317>)

「バカ」の場合と同様に、例 (12) では「隣の席に座っていた美人がすごい(人である)」という解釈ではなく、「隣の席にとっても美しい女性が座っていた」という解釈の方が適切で、例 (13) でも「このような特徴を持つ美人がサポーターである」という解釈よりも、「これほど美しい女性がサポーターである」の方が適切であると考えられる。つまり、「美人」の場合にも、程度が表されており、美しさと関わるスケールが中心的となっていることが明らかである。

このように、日本語で程度的として分類できる名詞は、特定のスケールがその使用において中心的となり、「すごい」と「ひどい」、そして「こんな」類と共に起している文脈において、程度を表すことが可能である。

4. 日本語における非程度的名詞の特徴

日本語にも程度的として分類できる名詞が存在していることは確かではあるが、程度的名詞はその使用において特定のスケールが中心的となるものであるという定義から考えると、ある程度特殊なものとしても捉えられる。換言すれば、

名詞の大半は、非程度的なものとなるわけである。

程度的名詞と非程度的名詞は、具体的にはどのような違いがあるのだろうか。まず、Bolinger (1972) に倣って行ったテストから見られる違いがある。上記のとおり、「すごい」と「ひどい」そして「こんな」類は、程度的名詞と共起している場合には、程度を表すことができるが、非程度的名詞の場合には、そのような程度的な解釈は不可能である。以下には、「日本人」を非程度的名詞の代表的な例として取り上げ、テストを行う。

- (14) パックンがフィリピンへの緊急取材を断行。兵士たちにパックンが直撃！
本音を聞いてみた。しかもその地域には、すごい日本人がいた！孤児たちを預かって図書館を運営するおじさん。パックンの感動取材が、そこに。

(<https://www.tv-tokyo.co.jp/ikegamiakira/150412.html>)

- (15) そして、正之助が「こんな日本人を見なかったか？」と三亀松の特徴を挙げて尋ねると、「大層悪そうな人相ですね。なかなか悪そうなこともしていそうです。それに比べたら自転車のブレーキなんて…」と笑いを誘っていました。

(<http://news.yoshimoto.co.jp/news2013/2013/03/entry43152.php>)

例 (14) では、「日本人」は「すごい」に修飾されているが、「バカ」のような程度的名詞の場合とは異なり、程度が表されているとは言えない。(14) では、「その地域にいた日本人がすごい」という解釈からもわかるとおり、「すごい」の機能は、「日本人」が示す対象を区別することである。例 (15) でも「このような特徴を持つ日本人を見なかったか」と尋ねている解釈が妥当であり、「こんな」は程度ではなく、「日本人」の特徴を表しているわけである。

つまり、日本語では「すごい」と「ひどい」そして「こんな」類は、「バカ」のような程度的名詞と共起している文脈に限って程度性表現として機能でき、それに対して、「日本人」のような非程度的名詞と共起している文脈においては、

名詞の対象を区別する機能、あるいはその対象の特徴を示す機能を持つ。この違いは、Bolinger (1972) が指摘した **big** や **enormous** そして **such** との共起における、英語の程度的名詞と非程度的名詞の違いを反映する。具体的には、第2節のとおり、非程度的名詞と共起している場合には **big** や **enormous** は Bolinger (1972) が **distinguishing use** と呼ぶ、対象を区別する働きをし、**such** は Bolinger (1972) が **identifying use** と呼ぶ、特徴を示す働きをする。

程度的名詞と非程度的名詞の二つ目の違いは、後者が程度性表現としての機能を保つものと共起している文脈から見られる。上記に挙げた例 (2) そして以下に挙げる例 (16) でも分かるとおり、非程度的名詞でも、「非常に」や「とても」のような程度副詞と共起していれば、程度的に使用されることが可能となる。

- (16) こんな自由な親から、どうしたことかとても真面目な女の子が育ちました。ハーフでありながら、心はとても日本人です。

(<https://ateliercollegial.com/1962-2/>)

日本語における非程度的名詞の程度的な使用の裏に、どのようなメカニズムがあるのでしょうか。本稿では、非程度的名詞がいわゆる程度副詞と共起している文脈に注目してそのメカニズムを分析する。結論から言うと、日本語の非程度的名詞と程度副詞との共起は、発話者が名詞と関わる百科事典的知識²に含まれる、程度性を持つと考えられる側面を取り上げている文脈において可能であるという立場をとる。

Bolinger (1972) は、**what** との共起に関して、程度的として分類する **child** (子供) の場合にはその名詞の意味に含意されている特徴が取り上げられているのに対し、非程度的として分類する **lad** (少年) の場合には、**reckless** (呑気) や **amorous** (多情) や **inventive** (クリエイティブ) や **amusing** (面白い) のような、その名詞の意味に含意されていない側面が取り上げられていると述べている。Bolinger (1972) が非程度的名詞として分類する **lad** に関して **reckless** (呑気) や **amorous** (多情) 等、複数の可能な解釈を提案していることから、非程度的名詞の場合には、文脈や発話場面によって、その解釈が変わる可能性があることがわ

かる。

- (17) a. **What a lad John is!** b. **What a child John is!**

The first exclaims at something external to the fact of being a lad. Being a lad is assumed, and the surprise is directed to some quality such as being extraordinarily reckless, amorous, inventive, amusing, or whatnot. The underlying sentence is *John is a lad who is (surprisingly) X*. *Lad* is nondegree. The second refers to childishness, and the underlying sentence is *John is (surprisingly) a child, or like a child*. *Child* is degree.

(Bolinger 1972:61)

また、佐藤（2019）は、「Nすぎる構文」と呼ぶ、名詞に「-すぎる」が付いている文脈に着目し、「-すぎる」によって表されるのは、名詞が示す対象ではなく、その対象に関する百科事典的知識による性質の過剰であると述べている。例えば、「天使すぎるアイドル」という言い方について、「天使のようにかわいい」という性質に焦点が当てられるとのことである。佐藤（2020）でも「Nすぎる構文」が扱われており、トマトの酸味に焦点が当てられるとされる（18a）と、トマトの見た目に焦点が当てられるとされる（18b）のような例を元に、同じ名詞が用いられるとしても、焦点が当てられる性質が様々であると主張されている。

- (18) a. このケチャップはトマトすぎる。
b. そのネックレス、トマトすぎない？

(佐藤 2020:59)

上述のとおり、本稿では、日本語における非程度的名詞の程度副詞との共起による程度的な使用は、発話者が非程度的名詞と関わる百科事典的知識に含まれる、程度性を持つ、言い換えれば、スケールを構成すると思われる側面を取り上げている文脈で成立すると考える。この立場をとれば、下記の例（2）と例（16）

における「日本人」の程度的な使用が説明できる。

- (2) その、やはり仕事をごちゃごちゃいわれるのはといいますか、どうしてもやはり行政官も非常に日本人ですので、完璧さというのですか、そういうコンシステンシーって非常に気にしているところが、日本は特にあると思うのですけれど。

(<http://www.aec.go.jp/jicst/NC/iinkai/teirei/siryo2016/siryo18/siryo5-2.pdf>)

- (16) こんな自由な親から、どうしたことかとても真面目な女の子が育ちました。ハーフでありながら、心はとても日本人です。

(<https://ateliercollegial.com/1962-2/>)

例 (2) では、発話者が、「日本人」という非程度的名詞と関わる百科事典的知識の中から、「コンシステンシーって非常に気にしている」という情報を取り上げている。「コンシステンシーを気にする」という側面に関しても「非常に」が使用されていることから、この側面は程度性を持つことがわかる。これによって、非程度的名詞である「日本人」に関しても、程度副詞「非常に」との共起が容認されるわけである。例 (16) でも同じメカニズムが見られ、「日本人」と関わる知識の中から今回は、「真面目である」という側面が発話者によって取り上げられている。この側面は程度性を持っているということは、「とても真面目な女の子」でも程度副詞「とても」が用いられていることから明らかである。

つまり、非程度的名詞の程度的な解釈が可能である文脈から考えても、場面によって取り上げられるスケールが異なる非程度的名詞と、特定のスケールが中心的となる程度的名詞との違いがわかるのである。なお、非程度的名詞の程度的な使用は、発話者が発話場面においてある側面を取り上げていることで成立するということから、ある興味深い現象と繋がる。程度性に関する研究では、スケールの構成に関して極限の有無が中心的な問題となっている。その極限の有無は、程度副詞との共起によって表されているという考え方が一般的である。Paradis (2001) は、英語で共起できる形容詞と程度副詞は、程度性の観点から同じ性質

を持つ必要があると主張した上で、very や terribly 等のような副詞と共に起できる形容詞は、unbounded（非有界）と呼び、極限が存在しないスケールを構成すると述べている。それに対し、completely や almost 等のような副詞と共に起できる形容詞は、bounded（有界）と呼び、極限が存在するスケールを構成すると述べている。Kennedy and McNally（2005）も、以下に引用する例文からわかるとおり、completely や fully や 100% のような副詞との共起可能性を基準に、ある形容詞が構成するスケールにおいて、極限が存在しているか否かが判断されると指摘している。

(19) Open scale pattern

- a. Her brother is completely ??tall/??short.
- b. The pond is 100% ??deep/??shallow.
- c. Max is fully ??eager/??uneager to help.

(20) Closed scale pattern

- a. The room was 100% full/empty.
- b. The flower was fully open/closed.
- c. The figure was completely visible/invisible.

(Kennedy and McNally 2005:355)

要するに、程度性に関する研究では、ある形容詞は、極限が存在するスケールか、極限が存在しないスケールかのどちらかしか構成できないという考え方が一般的である。この区別は日本語にも適用でき、例えば北原（2013）は、「とても」や「非常に」や「かなり」や「少し」のような副詞は極限が存在しない「開放スケール」を修飾するのに対して、「ほぼ」や「ほとんど」や「完全に」や「全く」のような副詞は極限が存在する「閉鎖スケール」を修飾すると述べている。

非程度的名詞の程度的な使用に関しては、このような極限の有無による制限が適用されない。より具体的に言えば、非程度的名詞の程度的な使用においては、発話場面において発話者が取り上げる側面によって、極限が存在するスケールでも極限が存在しないスケールでも成立が可能である。上記に分析した例（2）で

は、取り上げられている側面「コンシステンシーを気にする」は、「とても」や「非常に」等に修飾される側面であるため、「日本人」の程度的な使用においても極限がないスケールが成立し、「非常に日本人」という言い方が可能となる。また、例（16）で、「真面目である」という側面は、「とても」や「非常に」等に修飾され、極限が存在しないスケールと関わるため、「とても日本人」という言い方が可能となる。一方、以下に挙げる例（21）と例（22）のように、発話場面において極限が存在するスケールと関わる側面が中心的となることも可能である。例（21）では、「完璧な日本語で話し」という、発話者の説明からわかるとおり、取り上げられている側面は、「完全に」や「ほぼ」に修飾され、極限が存在するスケールを構成する「完璧である」という側面である。それによって、非程度的名詞に関しても、「完璧に日本人」という程度的な使用が可能となっている。また、例（22）でも、明確には説明されていないものの、「話している日本語が完璧である」という側面が取り上げられていることから、「完璧に日本人」という使い方が容認されると思われる。

- (21) しかし、その店の従業員？責任者の男性は、日系ではなく完璧に日本人でしたね。日本語の詳細部分まで理解していましたし、また完璧な日本語で話し、私の関西弁まで理解しましたから、間違い無いでしょう。（国籍を変えたら知りませんが・・・。）（笑い）しかし、もう少し愛想があっても良いのではないかなと思う対応でしたね。

(<https://4travel.jp/travelogue/10701909>)

- (22) 日本映画では「不夜城」「リターナー」「死神の精度」で、いずれも主演している。日本語を聞いていると、完璧に日本人だという印象だけど、本人はどう思っているのかな？

(<http://narendora.blog103.fc2.com/blog-category-4.html>)

このように、日本語における非程度的名詞は、程度的名詞とは異なり、「すごい」と「ひどい」、そして「こんな」類と共に起している場合には、程度的な解釈

は不可能である。その一方で、程度副詞との共起がある文脈においては程度的な使用が可能となるものがあり、特徴としては、発話者が取り上げている側面によって、極限のあるスケールと、極限のないスケールの両方が成立できるという現象が挙げられる。

5. 程度性の観点から見える名詞と形容詞の連続性

従来の日本語学研究においては、いわゆる品詞間の連続性が日本語の特徴として指摘されることが多い。ここでは、本稿で扱う程度性の観点から考えても、日本語の名詞と形容詞の間に連続性が見られることを指摘し、その連続性を二つの観点から考察する。

まず、日本語で程度的として分類できる名詞についてである。本稿では「バカ」を代表的な例として取り上げ、佐野（1997）が取り上げている「美人」に関しても分析したが、このようなものは、形容詞³として機能すると思われる場合もある。従来の研究においても、名詞と形容詞の類似点や相違点は詳細に分析されている。

佐野（1997）も、「美人」「勉強家」「努力家」等のように、「の」を介しても介さなくても「かなり」のような程度副詞と共起できる名詞に関して、形容詞的に働いている場合もあると述べている。下記の例文を元に、これらは、「の」を介して「かなり」と共起している文脈では、格助詞を伴い、名詞として機能しているのに対して、「の」を介さずに「かなり」と共起している文脈では、格助詞を伴うことができず、形容詞的なものとなると主張している。

(23) a. かなりの美人が来た。 * b. かなり美人が来た。

(佐野 1997:127)

本稿では、日本語の程度的名詞の代表的な例として「バカ」を取り上げ、分析した。第3節の考察では例(10)と例(11)を用いて、「バカ」は「すごい」と「こんな」のような形容詞的要素に修飾され、そして「が」と「を」という格助詞が付いており、名詞として機能していることを示した。

- (10) もちろん、漫画家はみんなバカというわけではなく、手塚治虫が医師免許を持っているように、頭が良い人も多いのだが、全員頭が良いと思われるのも困る。他の職業と同じように「たまにすごいバカが混ざっている」と思って欲しい。

(<https://shosetsu-maru.com/essay/hakuman/32?page=2>)

- (11) 誰が見ても採用されるだろうという人がアッサリ不採用になるし、「何でこんなバカを雇うんだ!」と言いたくなる人を採用したりします。結果を見るまではわかりませんよ。

(<https://jobcatalog.yahoo.co.jp/qa/list/13254162948/>)

しかし、佐野（1997）も指摘しているとおり、程度副詞との共起がある場合には、日本語で程度的名詞として分類されるものは、形容詞としての機能になると思われる。例えば、次の例（24）では、「とてもバカな生き物」における「バカ」は、「な」が付いた形で「生き物」を修飾していることからわかるとおり、形容詞として機能していると言える。

- (24) それに対して池田教授は生物学者の視点から「普通生き物ってね、辛いもの食べないんですよ。生き物は本能的に辛いものの避けてるのね。人間は辛いもの食べるっていうとてもバカな生き物ですよ。動物として人間はまともじゃない」と、辛いものである「カラムーチョ」に対して「超」のつくほど辛いコメント（「まともじゃない」篇 15 秒）。

(<https://koikeya.co.jp/news/detail/521.html>)

つまり、程度的名詞として分類されるものが形容詞として機能する場合もあるということは否定できない。本稿では、この現象を程度性の観点から見た、名詞と形容詞の間の連続性として捉える。そしてここで注目したいのは、程度的名詞として機能できるものは、その使用において取り上げられる側面はいつも同じで

あるという現象である。例えば、例（10）と例（11）では、程度的名詞として機能している「バカ」に関して、「頭が悪い」として解釈できる側面が取り上げられているが、それは、例（24）のような「バカ」が形容詞として機能している場合と同じものであると言える。言い換えれば、程度的名詞の場合には、発話において成立するスケールは変わらないわけである。

そして、日本語で非程度的名詞として分類できるものについてである。第4節で述べたとおり、非程度的名詞の程度的な使用は、発話者が名詞と関わる百科事典的知識の中から、程度性を持つと思われる側面を取り上げているというメカニズムによって容認される。このメカニズムは、日本語における非程度的形容詞の程度的な使用においても見られる。Ciolca (2022) では、日本語の非程度的形容詞の特徴が詳細に分析されている。「科学的な」や「政治的な」等のように、カテゴリー所属を表すものは、日本語の非程度的形容詞の代表的な例として取り上げられ、これらは、発話者がその百科事典的知識に含まれる、程度性と関わる側面を取り上げている文脈においては、程度的な使用が可能となると指摘されている。ここでは、「科学的な」を含む例文を用いて説明する。

- (25) 余談になりますが、この『栄養週期』は、ぶどうに限らず、様々な作物に応用できる栽培法で、簡単に言いますと、作物の成長段階に応じて必要な栄養素が違うことや、それぞれの段階での作物の生理を理解して、栄養価・収量・味・病虫害への抵抗性など人間の目的に沿って、作物をコントロールする技術です。とても科学的な栽培法ですが、ちょっと難解で手間もかかるため、効率優先の農業のもとでは、広まりませんでした。

<http://gigapplus.makeshop.jp/tanizawa1979/tsushin/106.pdf>

(Ciolca 2022:75)

例（25）では、非程度的形容詞として分類される「科学的な」は「とても」と共起しているが、このような程度的な使用は、発話者が発話場面において「科学的な」と関わる百科事典的知識の中から「効果的である」のような、程度性を持

つ側面を取り上げていることから成り立つと言えるのである。これは、本稿で非程度的名詞である「日本人」に関して、発話者が「真面目である」あるいは「コンシステンシーを気にする」のような側面を取り上げているメカニズムと同じであり、日本語の非程度的名詞と非程度的形容詞の間の連続性を示している。

6. 終わりに

本稿では、日本語における名詞の観点から見た程度性を分析することを主な目的とし、まずは、日本語でも程度的名詞として機能できるものとできないものを区別する必要があることを指摘した。先行研究に倣い、程度的名詞と非程度的名詞の違いを明確にするために二つのテストを行った。具体的には、「すごい」や「ひどい」、そして「こんな」類との共起において、「バカ」のような程度的名詞の場合には程度が表されており、それに対して、「日本人」のような非程度的名詞の場合には、程度的な解釈は不可能であることを示した。

そして、日本語の非程度的名詞が「とても」や「非常に」のような程度副詞と共起している事例を元に、このような程度的な使用の裏にあるメカニズムを明確にした。具体的に言えば、発話場面において発話者が非程度的名詞と関わる百科事典的知識の中から、程度性を有すると思われる側面を取り上げている場合には、スケールが成立し、程度的な使用が容認されると述べた。

日本語の名詞の程度的な使用に関する興味深い現象として、程度的名詞の使用においてはいつも同じスケールが中心的となるのに対して、非程度的名詞の使用において中心的となるスケールは発話場面によって異なり、そのスケールの構成に関しては制限がないという現象を指摘した。つまり、非程度的名詞の場合には、極限のないスケールの成立を表す「とても」のような程度副詞だけではなく、極限のあるスケールの成立を表す「完全に」のような副詞との共起も可能であることを明らかにした。そして、特に非程度的名詞の程度的な使用と、非程度的形容詞の程度的な使用を動機付けるメカニズムが同じであることを元に、程度性の観点からでも、日本語の品詞間の連続性が見られることを述べた。

注

- 1 Bolinger (1972) では、degree nouns (程度的名詞) 及び nondegree nouns (非程度的名詞) という用語が用いられている。程度性に関する研究では、gradable (程度的) 及び non-gradable (非程度的) という用語も用いられることが多い。
- 2 百科事典的知識に関しては、Langacker (1985) の定義に従い、常識として知られている情報から、個人の経験から得られる情報まで含まれていると考える。
- 3 佐野 (1997) では、「形容動詞」という用語が使われているが、本稿においては、いわゆる「イ形容詞」と「ナ形容詞」を区別せずに、両方を「形容詞」と呼ぶ。

参考文献

- 北原博雄 (2013) 「量修飾の可能性と、被修飾句のスケール構造の違いに基づいた、現代日本語の程度副詞の分類」『国語学研究』第 52 号 東北大学文学部『国語学研究』刊行会 pp. 29-43
- 佐野由紀子 (1997) 「程度副詞の名詞修飾について」『日本学報』第 16 号 大阪大学文学部 日本学研究室 pp. 121-133
- 佐藤らな (2019) 「天使すぎるアイドルは何が過剰なのか—N すぎる構文の意味—」『東京大学言語学論集』第 41 号 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部言語学研究室 pp. 279-293
- 佐藤らな (2020) 「名詞が程度性を持つとき—N すぎる構文を通して—」『日本言語学会第 160 回大会予稿集』pp. 56-62
- 蔡薰婕 (2018) 「『とても』に修飾される語について」『文化』第 82 号 東北大学文学会 pp. 43-58
- Bolinger, Dwight (1972) *Degree words*, The Hague: Mouton
- Ciolca, Raluca Maria (2022) “Marked uses of non-gradable adjectives in Japanese: towards a systematic description of gradability,” *Annals of “Dimitrie Cantemir” Christian University. Linguistics, Literature and Methodology of Teaching* 21, pp. 63-81 (http://afilis.ucdc.ro/doc/FLLS_Anale_1_2022.pdf)
- Kennedy, Christopher and Louise McNally (2005) “Scale structure and the semantic typology of gradable predicates,” *Language* 81(2) pp. 345–381
- Langacker, Ronald (1987) *Foundations of cognitive grammar* (vol 1), Stanford: Stanford University Press
- Morzycki, Marcin (2009) “Degree Modification of Gradable Nouns: Size Adjectives and Adnominal Degree Morphemes,” *Natural Language Semantics* 17(2) pp. 175-203

Paradis, Carita (2001) “Adjectives and Boundedness,” *Cognitive Linguistics* 12, pp. 47-64

チョルカ ラルカ マリア

(大阪大学大学院言語文化研究科日本語・日本文化専攻博士後期課程)

Noun Gradability in Japanese

Differences between gradable and non-gradable nouns

CIOLCA Raluca Maria

The present paper analyses gradability in the nominal domain in Japanese, employing examples produced by native speakers to highlight the differences between gradable and non-gradable nouns. Drawing on previous research, the paper proposes two tests to differentiate between the two types of nouns, with *baka* ('idiot') representing the former, and *nijonjin* ('Japanese person') representing the latter. The tests are based on the functions of *sugoi* ('amazing')/ *hidoi* ('terrible') and the *konna*-type ('such') determiners, which express degree when co-occurring with gradable nouns and distinguish or identify the object when co-occurring with non-gradable nouns.

Further differences between the two types are demonstrated by focusing on contexts in which the nouns have a gradable interpretation. While gradable nouns such as *baka* ('idiot') involve the same scale irrespective of the context, in the case of non-gradable nouns such as *nihonjin* ('Japanese person'), gradable interpretations are allowed if the speaker focuses on a particular feature which is associated with the noun and involves a scale, with that feature changing depending on the context.

The analysis in this paper also sheds light on two interesting phenomena associated with gradable interpretations of nouns in Japanese. Although in the literature gradability is generally seen as fixed, the mechanism behind gradable interpretations of non-gradable nouns allows for different types of scales to be realized at the same time. Moreover, this mechanism points to similarities between non-gradable nouns and non-gradable adjectives, proving that gradability is relevant when it comes to the parts of speech continuity as well.